谷田風土記 74

出雲の神・平沢神社

県立大学の西に谷がある。平沢というのだが、ここの平沢寺は有名だが、『平沢神社』はあまり知られていない。

平沢の起こりについて、『駿国雑志』は次のように記している。

『里人言う、今有度山七・八分の奥より沢水出で甚だ深し、考えるに是深沢にして、平沢は名の転ずる也』

すなわち有度山(日本平)の山あいから水が流れ出て、沢になっているので平沢というのだとしている。この山は水が少ない地層で、こうしたわき水は少ないのである。

少ない水を利用して、水田がつくられていた。『駿国雑志』は、『一村の高十五石』としている。『駿河国新風土記』という江戸時代の地誌には、『高十五石、民戸四煙』とあり、僅か四軒しか農家がなかったことが分かる。

以前は駿東郡の飛び地

面白いのは、『平沢寺領にして、御朱印に駿東郡平沢村とありて、今も駿東郡という』としていることだ。

ほかの江戸時代の資料を見ても、『駿東郡と称す』とある。これは平沢寺が、寺社奉行の関係で、駿東郡の寺の末になっていたからだろう。

戦前までは、駿東郡の飛び地だと言われていたという。ここに面白い神社がある。

『平沢神社』というより、ホコラというべきだが、平沢寺のなかに祭られているのだ。

ご祭神は『大己貴命』オオアナモチとお呼びする。オオクニヌシノミコトのことである。

ということは、このあたりに数少ない『出雲系』の神社となることになる。開拓の神であり、ヤマトタケルがこの地に来たとき、すでに住んでいた人々の信仰していた神がこうして生き残っているわけである。

その点で、貴重なホコラであるが、出雲系は静岡の西隣・岡部町に『三輪神社』、遠州森町に『小国神社』がある。全体的に少なく、このホコラは貴重なものと言えよう。いずれにしても、ヤマトタケル以前からの神が今も祭られているとは、興味深いことである。

（国際関係学部教授・
高木桂蔵）

平沢神社

「はばたき」はわれらを結ぶメッセージ便

―第82号の出版にあたって―

広報委員長　木苗　直秀

本学の広報誌は平成４年11月に「学内ニュース」として第1号が発刊されてから、途中「はばたき」と名称が変更され、ここに第82号が刷り上がった。今まで大学から学生、教員へ、教員から学生へ多くのメッセージが届けられた。また、学生のクラブ、サークルやボランティアの活動状況や先生方からの寄稿文も伝わっていたと思う。号を重ねる毎に内容は次第に充実してきた。しかし、本年4月からは学内に「電子掲示板」も設置されたのを機会に「はばたき」も衣がえする時期が来たように思われる。「手に取りたくなる情報がある」こと、「見やすい」ことは当然であるが、皆が参加できるページが是非必要である。また、国や県から大学に関する情報も掲載されることが望ましいと思う。皆が責任をもって情報を発信し、共有するためのメッセージ便がこの「はばたき」になることを願っている。委員一同張り切っているので学生、教職員の御支援、御協力を大いに期待したい。

学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル、その他寄稿を積極的にお寄せ下さい。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ（管理棟２階）法月あてにお願いします。

Ｅ―ｍａｉｌ：ｋｉｊｏ４@gm. ｕ－ｓｈｉｚｕｏｋａ－ｋｅｎ．ａｃ．ｊｐ

企画・編集　静岡県立大学広報委員会　ＴＥＬ　０５４－２６４－５１０３
静岡県立大学ホームページアドレス ： http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています

volume 82
JUNE 21 2002

HABATAKI
はばたき
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada,Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS

●CONTENTS●

学部入学式学長式辞 …… 1
学部入学式誓いの言葉 …… 5
大学院入学式学長式辞 …… 6
学長室開放のお知らせ …… 9
平成14年度開学記念行事 …… 10
漢方と薬草の会開催案内 …… 11
はばたき寄金からのお知らせ …… 12
強い骨を作ろう（実践編） …… 13
薬学部講演ハイライト数が全国一 …… 15
教員の人事 …… 15
受賞された人 …… 16
図書館だより …… 17
クラブ・サークル紹介（準硬式野球部・吹奏楽部） …… 18
谷田風土記74 …… 19
第82号の出版にあたって …… 19

平成14年度 静岡県立大学入学式式辞

静岡県立大学長　　廣部 雅昭

平成１４年４月１０日、本学大講堂で静岡県立大学入学式が行われた。石川嘉延県知事を始め、多数のご来賓出席のもと、５学部５６９名の新入生を前に廣部学長が式辞を述べた。

また入学生を代表して、国際関係学部、一ノ宮貴子さんが誓いのことばを述べた。

本日ここに、石川静岡県知事、浜井県議会副議長をはじめ、ご来賓の方々、また多数の保護者の方々のご臨席を賜り、盛大に平成14年度静岡県立大学入学式を挙行出来ますことは、誠に慶ばしい限りであり、関係者一同深く感謝を申し上げる次第です。

まず最初に、これまでの努力が実って、この度めでたく本学への入学を果たされた、５学部 569名の皆さんに対し、大学を代表し、心からのお祝いと歓迎の意を表したいと思います。またこれまで長い間、ご子弟を慈しみ、支えてこられたご家族の皆様に対しましても心からの敬意とお祝いを申し上げたいと存じます。

本学は、昭和62年、静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の県立３大学を改組統合、あわせて新学部を増設し、発足したもので、現在５学部８学科、大学院５研究科、付属研究所、および短期大学部を擁する総合大学であります。部局構成も、薬学部、食品栄養科学部、国際関係学部、経営情報学部、看護学部、医療・福祉系の短期大学部、環境科学研究所、というように、国際化、情報化、高齢化、環境問題という、21世紀における最重要課題を展望しつつ、新しい時代を支える有為な人材の育成を目標として設立された点で、先見性のある、わが国の中でもユニークな公立大学として社会の評価を得てまいりました。

しかし我が国も、本格的な少子化時代の到来を目前にし、長引く経済不況ともあいまって、国公私立を問わず、すべての大学を取り巻く諸状況は、現在さらに厳しさを増してきており、その存在をかけた抜本的な改革が求められております。

２年後を目途に、国立大学の統合・再編や法人化への具体的方向が示されていることは周知の通りでありますが、公立大学にも必ずその波はやって来るはずで、私どももその背景を直視し、それに対応し得る自律的変革を目指さなければなりません。本学は今年で創立後15年を経過したことになりますが、その建学精神や、各部局の設置理念を今あらためて振り返って見るとき、新しい21世紀においてもなんら色あせたものではなく、その存在意義は益々高まっていると言えます。必要なことは、設置目的のより明確な具現化を図ることであり、その実現に向けて、教職員、学生が意識的に取り組むさらなる努力と、それらを阻む諸々の要因を取り除くことこそが、今強く求められているものと考えております。

新たに入学された皆さんは、明確な目的意識をもって、それぞれの学部を選択した筈であり、これから受ける教育の中で、それぞれの学部の設置目的や理念がどのような関わりをもって示されるのかを意識しつつ、積極的に学び取る姿勢が必要であります。社会が皆さんに求める真の実力は、与えられるというより、自ら獲得するものであるという意識が大切であります。漫然と聴く講義などからは、感動も伝わらず、得るものも、実力として身につくものも少ないと知るべきであります。もちろん教育する側の情熱と、理解させる能力が必要なことは言うまでもありませんが、授業は教師と学生との緊張感あふれる双方向的な真剣勝負の場であるという意識が、教育の質を高め、効果を生み出すことになるのであります。いずれにしても、大学は単位を取得し、卒業さえすれば良いという時代は、すでに終わったということを十分認識しておく必要があります。

最近、県内某大学の活動的な学生諸君が、県内の国公私立大学の学生さん達に、それぞれが在籍する大学における満足度についてアンケート調査を行った所、本学の学生の満足度が極めて高いという結果が出たそうであります。対象学生などアンケートの実態が不明なのでコメントは控えますが、私は一方で安堵した反面、いささか心配になりました。現状に満足することからは、進歩や改善の努力は生まれないからであります。確かに本学の設備や、環境は他の多くの大学に比して素晴らしいものがありますが、今社会から求められている大学の在り様について、改善すべき点が少なくないことは、本学とて例外ではないと考えております。

これまでの大学の使命は「知の創造」「知の伝承」つまり「研究」と「教育」に重点がおかれて来たと言ってよいと思いますが、今日その成熟した成果を社会に還元すべしという強い社会の要請のもとで、大学は「知の活用」という点にもっと重点をおかなければなりません。すなわち研究の面では、基礎研究の成果を産学連携などにより応用開発研究に結びつける努力、教育の面では社会人の生涯教育などへのさらなる貢献などもその一例でありますが、大切なことは、それらを通して大学の研究や教育に瑞々しい活力を呼び起こすことが可能であるという認識を持つことであります。

学生の皆さんの立場で言えば、講義等で学んだ知識を何かに役立てようという意欲を持つことであります。その意識が働けば、さらに周辺知識を含めて、より深めるための知的欲求が芽生えるはずです。しかしながらその欲求を満たすための、例えば図書館などの充実度は、残念ながら十分とは言い難い状況にあります。これは本学に限らず殆どの大学に共通した問題であり、打開のための様々な方策が、現在模索されている所であります。学生の皆さんからも蔵書の数が足りないという声はよく聞くところですが、一方で知恵を働かせることも必要ではないでしょうか。私は「もっと教師を利用しなさい」ということを申し上げたいと思います。

私が学生の頃は、今よりはるかに事情は悪く、本を自分で購入することすら大変でした。私は一計を案じ、いろいろな教授の所に本を借りに行くことにしました。勉強家の教授ほど本を持っており、しかも沢山の書き込みなどがある。その中には「判らん！」とか「この説は間違っている！・・自分はこう思う・・」などとコメントが書かれていると、その教授が何に関心があり、どう考えているかなどが手にとるように判る上に、教授とのコミュニケーションも出来、大変勉強になった経験があります。

教授に限らず、教員は学生の皆さんを快く迎えてくれる筈です。講義室だけが教員とのコミニュケーションの場と考えず、積極的に扉を叩くべき

であります。これも「知の活用」と言えるでしょう。ついでながら申し上げれば、学長室も常時扉を開放し、学生の皆さんとのコミニュケーションがとれる態勢にしてあります。その際現状に対する不満などにも十分耳を傾けますが、私は必ず「君ならどうする」という建設的な意見を求めることにしておりますので、その答えも用意してお出で下さい。いずれにしても君達若い世代が、社会のあらゆる面で、現状に甘んずることなく、より良い、活力ある社会の実現に向けて、一つ一つ知恵を働かせる努力と、積極的な行動力を発揮することが、大きな転換期にあるわが国の将来にとって極めて重要であり、護送船団依存的体質が染み付いた“指示待ち批判族”に社会の変革を期待することは出来ないと考えるからであります。

日頃いろいろな人達から、学長は本学をどのような大学にし、またどのような学生を育てたいと考えているのかという質問をうけます。私は即座に「大学を構成する全ての部局が、それぞれの専門分野で一流と評価されるような大学にしなければならない。一流を目指す努力を怠り、最初から二流に甘んずるならば、必ず三流になる。そんな大学は社会から相手にされないし、学生も誇りが持てず、また県民の期待に応えることも出来ない。現に教職員はそのために日々努力し、実績もあげていると信じている」と答えております。しかし自己満足は進歩を阻むものであり、また本来評価というものは第三者によってなさるべきものと考え、本学も昨年度創立15周年を期して、すべての学部、大学院、研究所が、教育、研究、社会貢献などの現状と実績について外部評価を受けました。今年度はそれらの評価意見をも踏まえて、新しい時代における本学のさらなる発展の道を構想して参りたいと考えております。

また私が育成したいと考えている、期待される学生像とは“そうぞう力”豊かな人物であります。これには二つの意味があります。一つは、Creativityという意味の創造力すなわち独創性豊かな発想の出来る人物、今一つは、Imaginationという意味の想像力、すなわち未来に向けて大きなビジョン、夢を描ける人物です。この二つには共通した点があります。つまり既成の概念から脱皮して、新しいものを考え、産み出す能力であります。そのためには現状に満足せず、常に新しさを求めて前向きに考えること、旺盛な好奇心と、発想に“遊び”があることが重要であります。これが本当の“ゆとり”というもので、決して一般的に言われる“時間的なゆとり”を意味するものではありません。また興味をもって様々なことを学び、視野を広めることで奥の深いビジョン（構想）を描くことが可能になります。現代の若者に元気がないといわれるのは、思考が受け身で停止しているからで、思考が前向きになれば、目に輝きが増し、活力が生まれる筈です。

昨年、学生諸君の創造力を啓発する目的で、アイデアコンテストを企画し、日常生活の中で創意工夫をこらしている様々なアイデアや企画を募集いたしました。応募数が少なかったのが残念でしたが、中にきらりと光るものもあり表彰をいたしました。今年度も継続したいと考えておりますので、是非日頃からアイデアを練る習慣を身につけて頂きたいと思います。

大学では、専門教育に入る前、あるいは並行して、いわゆる教養教育が行われます。本学でも全学共通科目として［人間と文化］［人間と社会］［人間と自然］というテーマのもとに、全学部の教員が協力して行っているもので、自身の目指す専門領域以外の分野の知識や考え方を学ぶことで、視野を広め、教養を高めることを目的としております。近年教養教育の見直し論議が盛んでありますが、基本的には“個人が体系的な知識や知恵を獲得する過程、また社会とのかかわりの中で経験する様々な事柄を通して身につく、ものの見方、考え方、価値観の総体”であり、激しく変化する社会環境の中で、いかに柔軟に適応出来るか否かにその真価が現れる全人格的素養が“教養”であると言えます。いうまでもなく教養は大学のみでなく生涯をかけて涵養されるべきものでありますが、この時期出来るだけ幅広く、好奇心をもって多くの事を学んで欲しいと思います。

一方、専門学術領域は、ますます深く細分化されて行くと思われますが、その一方で今後は、学際化、総合化の方向にも大きく展開することが予想されます。その原動力となるのは、社会のニーズを認識し、その方向に様々なシーズを融合化することの出来る高度な課題探求能力を有する問題解決型の人材であります。そのような人材を育成することが、これからの大学や大学院の大きな使命であると思いますが、それは先に述べた「知の創造」「知の伝承」「知の活用」がバランス良くトライアングルを形成し、円滑に機能する大学において初めて可能であると考えます。本学もその点を十分意識しつつ、様々な改革を試みている所であり、今後目的をより明確にした教育や研究などが展開するものと期待しております。

最後に、本学は創立以来、国際交流を標榜し、世界各国の大学、研究所などと交流協定を結び、教員、学生の相互交流などを行う一方、多くの留学生を正規に受け入れております。本年も学部、大学院あわせて５ケ国27名の皆さんが入学をいたしました。現在、本学に学ぶ留学生は、新入生を含め10ケ国、約100名に及んでおります。美しい富士山を仰ぎ、快適な気候の静岡での充実した留学生活を送って下さることを心から願っておりますが、異国の地での生活や勉学の面で、当初は不安や困難を感ずることも少なくないと思います。大学としても出来うる限りの支援が出来るように心掛けておりますので、留学生の皆さんも遠慮なく

相談にお出で頂きたいと思います。また留学生の皆さんに期待したいことは、不自由であっても、出来るだけその国の言語、文化、習慣に慣れるよう努力することと、自国の殻の中だけに閉じこもらず、多くの日本人や他国の留学生などとも接し、多くの事を吸収して頂きたいということであります。また日本の学生の皆さんも留学生の皆さんと積極的に交わり、支援することなどを通じて、異文化を理解し、国際感覚を磨く絶好の機会として頂きたいと思います。

万物ことごとく躍動するこの時期、大学は新入生を迎えキャンパスは活気に満ちあふれます。勢いよく流れる水は常に清く、淀んだ水が腐敗しやすいことは、私どもの良く知るところでありますが、流れの中に生息する元気な魚は、常に水清き上流を目指して懸命に泳ぎ、勢いを失って死に体となった魚は流れに呑まれ、淀んだ下流へと流されて行きます。この度入学を果たされた皆さんは、どうか初心を忘れず、常に向上心をもって、自らを高める努力を果たして頂きたいと心から願っております。大学も世の中の激しい流れの中にあっても、常に目標を高く掲げ、困難があっても、一歩一歩上流に向かって教職員学生一体となって邁進して参りたいと思います。皆さんがこれからの４年間、生き生きとして、実りある学生生活を送り、本学に学んだことに誇りと喜びをもって卒業出来ることを心から願いつつ、皆さんへの歓迎の辞といたします。

誓いの言葉

新入生代表　　国際関係学部国際関係学科　一ノ宮　貴子

やわらかな春の日差しが降りそそぐこの佳き日に、私たちは憧れの静岡県立大学に入学することができました。本日は、私たち入学生のために、このような盛大な入学式を執り行っていただき、誠にありがとうございます。

また、ただ今は、学長先生を始めご来賓の皆様方からの温かい激励とお祝いのお言葉をいただき、新入生一同大変感激しております。心からお礼申し上げますとともに、この感激を胸に、志を高く勉学に励んでまいりたいと存じます。

今日の社会で私たちが住む日本など先進諸国は、様々な面でとても高い技術レベルを誇り、また、物資に恵まれた自由で豊かな生活を送っています。しかし、その一方でお金も食べ物も、水すら無い生活を送っている人々がいる国もあるのです。

昨年アメリカから報復攻撃を受けたアフガニスタンは、一昨年史上最悪の干ばつに襲われました。降水量が目に見えて減り、雪解け水が激変したそうです。地下水の水位も下がっています。雨が一滴も降らず、川は干上がり、井戸は枯れました。田畑や牧草地は乾き、砂漠になりました。多くの農民や遊牧民は難民となり都市に流れ込みました。この飢餓と水不足でこれまでに約１００万人が餓死したと言われています。

この干ばつを招いた原因に先進国の工業化が大きく関係していると思います。私たちの、自国の利益追求の結果、環境破壊が進み、途上国の国々を苦しめている面があります。

日本がグローバル化を考えるとき、例えば京都議定書の環境問題を推進していくために、世界をどうやって守るか、制御できるかということを考えていく役割があります。自国の利益追求ばかりをせずに、世界を見て、手を差し伸べるところはどこかということを、考えなければならないので

はないでしょうか。そして、すべての人が潤うためのグローバル化にしなければなりません。

このようなことが、私が静岡県立大学国際関係学部を選択した理由でもありますが、本日入学を許可されました５５０名の者は、薬学、食品栄養科学、国際関係学、経営情報学、看護学と、目指す専門はそれぞれ異なりますが、２１世紀を支える原動力となるため、日々精進努力してまいりたいと考えております。

本日新しい一歩を踏み出すことにより、今まで知ることのできなかった世界や新たな自分を発見する機会に巡り会え、両親を始めこれまで私たちを支えてくださった方々への感謝の気持ちを再認識するのではないかと思います。

新しい出発をするということは、希望でいっぱいの反面、不安もあります。しかし、これからの4年間を大切に、勉学や課外活動等を通じ、今後ますます進展する科学技術や国際社会の発展に大いに貢献できるよう、それぞれの専門性を高めつつ、自分自身の礎を築いてまいりたいと思っています。

とは申しましても、私たちはまだまだ未熟です。勉学の仕方一つとっても予想がつかないというのが、正直な気持ちです。そうした私たちを、学長先生を始め諸先生方、諸先輩方には、厳しくご指導くださるようお願い申し上げますとともに、今日の感激を糧に、日々研鑽してまいりますことを改めて決意し、誓いの言葉とさせていただきます。

平成14年度 静岡県立大学・大学院　入学式式辞

静岡県立大学長　　廣部 雅昭

本日ここに、平成14年度　静岡県立大学・大学院の入学式を挙行するにあたり、現在大学がおかれている社会的状況と、その中でこれからの大学院生活をおくる皆さんに対し、心構えなど若干の希望を申し上げたいと思います。

まず本年度大学院に入学を許可された５研究科合計１７０名の皆さんに対し、大学を代表して心からのお祝いと歓迎の意を表したいと思います。特に本年は新たに設置された薬学研究科医療薬学専攻修士課程に一期生が入学されました。設置目的を良く理解し、社会の要請に応えるべく研鑽を積まれることを心から期待いたします。

皆さんは、大学の学部教育あるいは博士課程においては修士課程での研鑽を経て、さらに高度で、より専門的な知識、技術を学ぶ一方で、研究の奥義を極め、すぐれた高度職能人あるいは研究者としての道を進むべく、大学院に入学された筈であります。新しい世紀を迎え、現在わが国の社会状況は、国際化、情報化、高齢化といった時代背景の大きな変動の中で、旧来の社会構造や、その根底にあった価値観が、複雑多様化する社会の急速な変化に適合できなくなっている・・またその意識変革が伴わないことで、混迷に拍車がかかっていると見ることが出来ます。

大学という社会においても、同様のことが起こっております。従来の義務感の伴わない「学問の自由」や、社会とのかかわりを意識しない「象牙の塔」に埋没してきた大学人の唯我独尊的姿勢が、もはや社会には受け入れられなくなって来ており、現在国公私立を問わず、すべての大学が存亡をかけ、構造改革に取り組まねばならない所に来てお

ります。２年後を目途に国立大学が統合・再編の上、法人化されることが決定しておりますが、それらを視野に入れた公立大学の改変も時間の問題であろうと思います。

改革の大きな柱は、〔大学の自立性の強化と経営への学外者の参画〕、〔評価に基づく資源の重点配分〕、〔能力主義に基づく悪平等の撤廃〕などであります。努力するものが報われ、堕するものが淘汰される・・・個人レベルではある意味で当然のことが、大学の組織そのものにも及んで来る時代になったということであります。

また結果として、あるいは意図的に、全国の大学は教育重点大学と研究重点大学の二極化の方向に向かうことが予想されます。学問が益々高度・多様化している一方で、高校レベルまでの学力の低下が顕在化している今日、大学では教養教育に重点をおき、専門教育は大学院でという動きも出ております。一面の真理は含んでいるものの、私はかなりの危惧をもっております。

今日大学および大学院に求められていることは、先程の学部入学式でも述べたことですが、従来大学の使命とされた「知の創造」「知の伝承」に、新たに「知の活用」を加えたトライアングル構造が有機的に機能し、相互に刺激・啓発し合う体制を強化することであると考えるからであります。そして日進月歩の著しい学問分野において、先端的知識を吸収・理解し伝承出来る瑞々しい教育は、真理を探求し、新しい発見とその学問的、社会的意義を考究できる研究者によって初めて可能であると思うからであります。　私は研究と教育は本来表裏一体のものであり、特に大学においての教育機能と研究機能の分離という安易な発想は、分野にもよるかも知れませんが、一歩誤ると教育の形骸化につながりかねない危うい側面を有していると考えております。一方で本学のように国家資格の取得を前提にした部局の多い大学においては、それぞれの専門分野で、高度職能人を育成することが、課せられた大きな使命の一つであり、学部は当然として大学院においても教育にかなりの比重をおくことが現在重要になって来ていることも事実であります。

それぞれの専門領域の知識や技術は、ますます深く、かつ拡大の一途をたどっており、これら先端的知識や高度な技術を習得するために、少なくとも修士課程においては、欧米のように教育に重点を置くことが必要になっております。しかし大学院では、ただ単に既成の知識や技術を習得することに留まらず、それらを有機的に結びつけ、応用的展開がはかれるような発想力豊かな研究者的センスを身につけることが大切であり、そこが学部教育とは違うところであると思います。この点については、理系も文系も基本的には同じであると考えております。

本年度大学院薬学研究科に医療薬学専攻が設置されましたが、ベッドサイドで患者と接しながら服薬指導などを行える高度な薬剤師を養成するためであります。県立総合病院の指導・協力も得て、同病院内に教育の拠点をおき、臨床の場で起こり得る様々な問題にも対処出来るリスクマネージャーの一員としての自覚と責任感を身につけるとともに、教科書や文献などからは得られない新しい問題点を発掘し、それを解決する能力・資質を養う事にあります。特に医療の場では、患者が“教師”であるという認識をもつことが最も大切であると思います。

次に大学院に求められている今一つの大きな使命は、学術研究の高度化とそれらを通じて、優れた研究者を育成することにあります。博士課程に進学する皆さんは、将来独立した研究者として、その一翼を担うことが期待されていると言えます。大学あるいは大学院における研究は、本来基礎研究に重点がおかれるべきでありますが、その成果を社会に役立つように分かりやすく発信することが現在強く求められております。基礎研究も画期的応用研究に結びついてこそ高い評価が得られるということを大学の研究者も認識すべきであります。

私の専門分野が薬学であり、話がそちらに傾斜することをお許し頂くとして、実は先日行われました日本薬学会年会において、発表総演題数約3100件の中で、学会の広報委員会が公正に評価・選定したハイライト研究５％の中に、本学薬学研究科の研究が11件選ばれました。全国の国公私立大学や企業も含む諸研究機関の中で第一位の成績でした。一昨年も同様の成果を挙げましたが、このことは本学の高い研究水準とともに、社会にアピールする研究が活発に行われていることを示すもので、日頃から研究成果の社会還元を意図して、目的を明確にした分かりやすい研究発表を行う習慣が身についている証ではないかと考えております。他の研究科においても関連する学会等で同様の実績を挙げているものと信じておりますが、今後も本学の存在感を社会に示すような優れた研究が輩出することを心から期待しております。

先程「知の活用」ということが社会から強く求められていることを述べました。我が国はバブル崩壊後の長期経済不況と低迷、経済のグローバル化に伴う経営戦略の大変革、アジア周辺諸国の台頭など、危機感を募らせており、日本の防衛策は知的財産のみと「科学技術創造立国」を宣言、1995年に科学技術基本法を制定し、以後様々な国策を展開していることは周知のことと思いますが、その核となる考え方は、大学の豊富な人的・知的資源を産学官連携により新産業の活性化に活用しようというもので、現在進んでいる大学の構造改革の背景の一つをなすものと私は見ております。
大学における人的・知的資産とは、「知の創造」を目的として行われ、蓄積された独創的な研究の成果であり、また研究活動を通じて育成されたチャレンジングな研究者、高度な知識・技能を習得した技術者を一般的には指しますが、基礎的研究の成果を社会に還元する場合、活用しやすいように方向性を示すことが、とくに「産学連携」を意識した場合には必要であります。シーズとニーズの効果的なマッチングを図るために、現在大学の中に、あるいは第三者機関としてＴＬＯと称される技術移転機構が続々と設立されたり、また大学の教員、大学院生の発明を自ら企業化するいわゆる大学発ベンチャーの創設も国は奨励し、そのための様々な援助資金も提供しております。これらはいずれも米国型の産学連携をモデルにしたものでありますが、わが国においては掛け声ほどには実効が上がっていないのが実情であります。それには様々な理由が考えられますが、基本的には産学官いずれも意識の変革が伴っていないところにあると思います。またいくら枠組みを作ってもそれを積極的に動かす人材が存在しなければ効果が上がるものではありません。研究者は技術のコーディネーターになれても、資金獲得なども含めた経営感覚を持ったプロモーターにはなりにくいものであります。産学連携は自然科学分野だけのものではなく、このような人材育成もこれからの大学あるいは大学院に求められているのであります。

また大学の研究者に最も欠けていたこととして、新規な研究成果に対する知的財産権の確保という意識であります。具体的には特許申請という形をとりますが、この権利を確保していないものは社会で活用されることはないということを認識する必要があります。研究の世界ではその成果をいち早く公表し、研究上のプライオリティを主張することで評価されますが、実用化の世界では権利化していない研究成果は新規性の喪失につながります。皆さんがこれから学会等で研究成果を発表する際には、特に注意が必要であります。言うまでもなく真に独創的で新規性のある成果でなければ研究上でも評価されませんし、最終的に権利化されることもありませんが、その裁定は第三者に委ねられるべきものであります。

研究はグローバルなもので、その成果を国際誌に投稿することによって、プライオリティを競うものでありますが、成果の権利化については、それぞれの国の特許制度によって保護されるために、例えば日本では通用するが、米国では通用しない発明も出てまいります。米国では他国の“基礎研究ただ乗り”に対抗するために“先発明主義”を採り、例えば大学などの研究室の実験記録に上司がサインするだけで権利が生ずる仕組みなどが出来ており、膨大な基礎研究費を投入する米国には

到底歯が立たないとさえ言われております。

今後真に経済効果を産み出す発明には、新しい分野を開拓する発想力が必要であり、そのためには異分野横断的な研究組織の構築が必須であると思います。また地域産業の発展に資すべき公立大学は、地域の特性を生かした独自の独創的研究を行うことが賢明な選択肢の一つであると思います。

産学連携など、人的・知的資源を通じて、特に地域貢献を期待される公立大学にあっては、教育機能と研究機能の有機的調和が必要でありこそすれ、機能の分離はなじまないということをご理解いただけたものと思います。

また今後大学の自立的経営の色彩が強まることが予想される中で、私ども大学人は、大学の知的資産の増強とその活用に強い関心を払うべきであるということを強調しておきたいと思います。

独創性とはなにか、そのような研究はどのようにして行われるか、基礎研究と応用研究の相互関係とそれぞれの重要性、研究の心構えなどについては、過去３回の大学院入学式等でそれぞれ述べておりますので、敢えて重複は避け、今回は大学が現在そして近い将来どのような道を進むことになるのか、その中で大学院に入学された皆さんは、どのような意識をもって今後に臨むべきかについて所信の一端を述べさせていただきました。

先行き不透明な時代ではありますが、皆さんは、紛れも無く新しい時代を担う、重要な知的活動の推進者であります。そのことを十分自覚し、頭脳の最も柔軟なこの時期に、多くの知識を吸収し、それらを活用しうる豊かな発想力と実地に生かす積極的な行動力を身につけて頂くことを心から期待し、大学院入学の歓迎の挨拶といたします。

学長室　“開放”のお知らせ

現在社会が求める『開かれた大学』を目指すには、大学内の様々な情報を可能な限り社会に発信し、説明責任を果たすとともに、広く社会の意見・要望を聴取する姿勢、すなわち大学と社会との双方向的な関わりが、今後の大学の発展のために不可欠であると考えます。

ひるがえって大学内においても、学長と教職員・学生とのコミュニケーションを円滑化し、構成員との直接的な意見交換の機会を設けることが、透明性のある風通しの良い大学運営を行うために必要であると考え、昨年度より次のとおり“学長室開放”を行っております。遠慮なく来室されることを歓迎いたします。

学長　廣部雅昭

◎　対　象：教職員、学生
◎　場　所：学長室（管理棟２階）
◎　時間帯：第１、３月曜日　１２：２０～１３：００（主として学生）
１３：００～１３：３０（主として教職員）
※予約は不要、但し公務の関係で不可能な場合もある
※上記曜日・時間帯以外の場合も可能な限り応対いたしますが、その際は必ず予約（学長秘書：内線5000）をして下さい。

平成14年度開学記念行事を開催

平成14年度の開学記念行事が4月26日（金）に開催された。今年で11回目となった開学記念行事は、本学創立15周年記念事業の総括としての位置付けでもあり、第１部では学長、各学部長、環境科学研究所長、及び剣祭実行委員会委員長を始めとした学生5名が参加し「２１世紀の県立大学」をテーマにパネルディスカッションが行われた。始めに廣部学長がパネルディスカッションを開催した趣旨、現在の本学を取り巻く状況及び課題等を述べられ、続いて各学部長、環境科学研究所長がそれぞれ各部局の現状及び将来へのビジョンなどを説明し、これに対してパネリストの学生やフロアーから質問や要望などが次々と出され、予定した時間をオーバーして閉幕した。

第２部の教職員と学生の懇親会である「はばたきの集い」では、実行委員の先生や事務職員とＡＶＬ委員会、国際学友会、クラブサークル連合、ラグビー部などの学生とが協力して準備、進行を行い、約３００名の教職員と学生が飲食を共にしながら語り合いお互いの親睦を深め合った。オープニングセレモニーでは、司会進行を新入生歓迎委員会の室伏里香さんと国際学友会会長の佐野国章君が務め、今井薬学部教授（第2部担当）の開会のことばにより開会した。廣部学長のあいさつに続き「おおとり会賞」の授与式が行われ、防災ボランティア活動等を行ってきた「防‘Ｚ」（ボウズと読み、看護学部の学生が主体のボランティアサークル）が、廣部学長から表彰を受けた。懇親会では飛び入りで、学生が創立15周年記念事業により作成した大学紹介ビデオが放映され、出席者に好評を得ていた。最後は木村学生部長が閉会の言葉を述べられ締めくくった。

「漢方と薬草の会」開催

漢方の基本を知り、薬草と親しむ会の参加者を募集！

県立大学薬学部では、平成１４年度・漢方と薬草の会を３回開催します。この機会に、漢方の基本を知り、薬草と親しむことにより、ご自分の健康を保ち、またご家族の健康を見つめなおしてはいかがでしょうか。多数のご参加をお待ちしています。

(概　要)

【テーマ】　**「代替療法としての漢方」**

【開催日時】第１回　平成１４年６月２日（日）
第２回　平成１４年８月４日（日）
第３回　平成１４年１０月６日（日）
各開催日とも午　前（９：００～１２：００）
午　後（１３：００～）　薬草園見学

【会 場】　静岡県立大学看護学部４階　１３４１１講義室（午前）
静岡県立大学薬草園（午後）

【内　容】

○第１回　　テーマ：漢方健康法
１．漢方健康法・・・・・　静岡県立大学教授　横田　正實
２．漢方便秘薬・・・・・　静岡県立大学教授　野口　博司
３．漢方よもやま話・・・　神戸学院大学名誉教授 斉木　保久

○第２回　テーマ：がんの代替療法
１．がんの代替療法・・・・・・・・　帯津三敬病院名誉院長　帯津　良一
２．中国伝統医学の内容　その１・・（株）ツムラ教育研修課　大武 光

○第３回　テーマ：アトピーの漢方治療
午　前（９：００～１２：１５）
１．アトピーの漢方治療・・・・・　あらなみクリニック　荒浪　暁彦
２．中国伝統医学の内容　その２・・（株）ツムラ教育研修課　大武 光
３．皮膚と薬草・・・・・・・・・　静岡県立大学名誉教授上野 明

【参加費】無　料

【応募方法】　参加を希望する期日（１回、２回、３回の別）を明記のうえ、各開催期日の５日前までに、往復ハガキにて下記まで申し込みして下さい。（３回分まとめて、あるいは複数人の場合、代表者の宛名でも可）
応募者多数の場合は各回２００名を抽選により決定し、お知らせします。

【応募先】〒422-8526 静岡市谷田 52-1　静岡県立大学薬学部漢方薬研究施設

【共　催】　静岡県立大学薬学部　漢方薬研究施設・付属薬草園・（株）ツムラ静岡営業所

はばたき寄金からのお知らせ

＜平成13年度はばたき寄金事業実績・収支結果報告＞

事業実績

○奨学金の授与
フィリピン大学及びモスクワ国立国際関係大学短期交換留学生（派遣学生3人、受入学生3人）に奨学金を授与した。

○文芸コンクール・スピーチコンテストの実施
第5回文芸コンクール（7月～10月）及び第4回学生スピーチコンテスト（11月3日）を実施した。

○創造力啓発コンテスト（学長企画イベント）の実施
発明や省エネルギーなどのアイデアの提案を募集し、7件の提案があり、うち２件に特別アイデア賞を授与した。

○はばたき賞の授与
海外で開催された学会で優れた研究発表を行った大学院生、成績優秀学生8人

＊事業内容の詳細は、本学ホームページの「はばたき寄金」の欄をご覧下さい。

収支結果

○収入　　５，４７６，８７８円
内訳　前年度繰越金　　３，９７９，９９８円
寄附金　　１，４９６，０００円（教職員３３件　その他９件）
雑収入　　８８０円（預貯金利息）

○支出　　１，７１６，７２２円
内訳　報奨等　　１，６７６，０００円
雑費（賞状筆耕代等）　４０，７２２円

○差引残高　３，７６０，１５６円（平成１４年度へ繰り越し）

＜5月２０日現在寄金残額　４，１８０，１５６円＞

＜前回報告はばたき80号以降の寄金者（敬称略）＞

寄附金総額　５４万円（１４件）

○教職員　木村良平、佐藤雅之（薬学部）、中山勉（食品栄養科学部）、石川准、湖中真哉、玉置泰明、津富宏、渡邉聡（国際関係学部）、小林みどり（経営情報学部）、北村キヨミ、矢野正子（看護学部）、加治和彦（生活健康科学研究科）法月義久（事務局）、和泉仁作（学生部）

○学外　大石紀子様（静岡女子短期大学卒）、おおとり会様（静岡女子短期大学、静岡女子大学同窓会）

ボランティアサークル「防‘Ｚ」おおとり会賞受賞

おおとり会（静岡女子短期大学、静岡女子大学同窓会）からいただいた寄金により創設された、クラブ・サークル団体等で年間を通じ、顕著な成績を収めた団体、或は顕著な活動を行った団体に贈られる「おおとり会賞」の第1回の授与式が4月26日に開催した「はばたきの集い」において行われました。

受賞したのは、本誌８０号で活動を紹介した「ボランティアサークル「防‘Ｚ」で廣部学長から表彰状と賞金を授与されました。

強い骨を作ろう！- 剣祭イベント報告 -（その3　実践編）

看護学部助手有志（健康増進研究会）

はばたき80号と81号では剣祭で行った、対象者約200名のうち、本学学生の骨密度検診結果を掲載しましたが、今回は最終回として骨を強くする食事･運動の実際の一部を紹介したいと思います。剣祭の時には、個別に栄養指導を受けたり、積極的にペットボトルのダンベルを持って運動に参加したりと、皆さん本当に熱心でした。今日から骨を強くする生活を始めませんか？

「私の食生活は大丈夫かしら？」一対一で真剣にアドバイス

【骨を強くする食事】

骨は毎日新陳代謝を行っています。新しく作られる骨の材料となるカルシウムをしっかり摂りましょう。

その１　カルシウムを意識的にとろう！

現在の日本人の食生活ではカルシウムは必要量（1日600mg）のほぼ90%程度の摂取であると言われています。今の食生活にプラス1品加えましょう。

小松菜のおひたし１鉢	232mg	生揚げの煮付け1鉢	240mg
ひじきの煮付け1鉢	186mg	いわしの丸干し1尾	420mg
ほうれん草のゴマ和え1鉢	152mg	しらす干しの酢の物1鉢	65mg
ヨーグルト1個	120mg	チーズトースト1枚	158mg
牛乳1本	200mg		

その2　規則正しい食生活を！

カルシウムをはじめとして体に必要な様々な栄養素を十分摂るには、1日3食きちんと食べることが基本です。また、まとめて食べるより分けて食べた方が、吸収を良くするには効果的です。極端なダイエットはカルシウムの不足を招き、骨密度の低下につながるおそれがあります。

その3　吸収の良いカルシウムを摂ろう！

カルシウムはあまり吸収のよい栄養素ではありません。効率よくカルシウムを摂るためには、カルシウム吸収の良い牛乳や乳製品を食べる習慣をつけましょう。

その4　たばこ、アルコールは控えめに！

たばこの吸いすぎ、アルコールの飲み過ぎはカルシウムの吸収を悪くします。どちらもほどほどの量を守りましょう。

その5　バランスの良い食生活を！

カルシウムはナトリウムやリン、カフェインなどの摂りすぎで吸収が悪くなり、ビタミンCやDで吸収がよくなります。どんな栄養素も偏って多量に食べることは好ましくありません。1日30品目を目標に様々な食品を食べること、1回の食事には主食と主菜、副菜の3皿をそろえましょう。加工食品やインスタント食品には食品添加物としてリンが多く含まれています。手作りの料理を心掛けましょう。

【骨を強くする運動】

骨を強くする運動は骨に体重や、適度な衝撃が加わるもの、筋肉を鍛えるようなレジスタンス（抵抗）運動を行うことによって筋肉が骨を適度に引張るようなもの、が適しています。腕を中心に運動を行えば腕の骨が、足を中心に運動を行えば足の骨が主に強くなります。そのため、全身の骨を強くするためには腕や足をくまなく使うようにいくつかの運動を組み合わせることが効果的です。皆さんが日常的に県立大学内や、自宅で行うことができる運動としてはウォーキング、ジョギング、ダンベル体操などがあります。普段運動していない人でも今日から手軽にできる運動として、ウォーキングを紹介したいと思います。

熱心にダンベル運動を行う参加者の皆さん

ウォーキングの方法

「正しい姿勢」で「週2～3回以上（できれば毎日）」「一回20～30分以上（できれば1時間）」行うのが効果的であり、そして何より「楽しく」行うことが、継続の秘訣になります。ウォーキングの歩幅は（左右の足の踵から踵まで）身長の約半分で、身長160cmの人の場合約80cmになります。皆さんの歩幅の印を地面につけてみて下さい。随分大またな、とびっくりするかもしれません。歩行速度は人によって運動能力が違うので軽く汗をかく程度のスピードと憶えればよいでしょう。ウォーキングで汗をかくためには相当な速度が必要です。姿勢は背筋を延ばし、手は大きく振ります。前の足は爪先を上に向け踵から着地するようにし、後ろ足の爪先で地面を蹴るようにします（図）。この他の骨を強くする運動を紹介した簡単な青いパンフレットが、本学管理棟2Fの企画スタッフ前のラックに入れてありますので、参考にしてください。

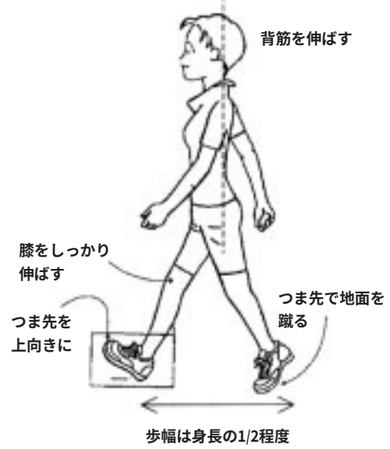

図　池田克紀：ウォーキングと水中ウォーキング、家の光協会　より一部改変

＊骨密度に関してはHPに掲載中です！http://nursing.u-shizuoka-ken.ac.jp/~w-kango/BoneDensity.htm
お問い合わせ：fitnurse@u-shizuoka-ken.ac.jp

今、話題の研究！、県大薬学部、講演ハイライト数が全国一

薬学部広報委員会

日本薬学会第１２２年会が３月２６日から２８日の３日間、千葉市の幕張メッセを中心に約８,５００名の参加者を集めとり行われました。ここでは例年、一般演題として薬学会会員が最新の研究成果を「化学系薬学」「物理系薬学」「生物系薬学」「環境・衛生・社会薬学」「医療薬科学」「医薬化学」の６つの系に分かれ発表を行います。本年度も合計３,１１６演題が発表されました。これらの中から年会組織委員会の広報委員会により５％（１５５演題）が抜粋され報道機関をはじめ薬学会全会員にハイライトとして紹介されました。このうち本薬学部が関係する演題数は実に１０演題の多きに及び、社会や時代の要請にマッチした活発な学究活動が証明される結果となりました。下にそのキャッチフレーズと関係教室名を紹介します。

緑茶による医薬合成法のグリーン改革	薬品製造化学
偽の鍵穴でエイズウイルスをだませ ！	薬化学、薬品製造化学
膜タンパク質を分子ハサミで散髪してその構造を探る！	薬品製造化学
人にはできないお仕事　- 酵素を利用して新しいタイプのステロイドを創る－	生薬学
細胞増殖に不可欠な亜鉛は脳腫瘍の検出に有効である	医薬生命化学
インフルエンザウイルスはどのようにして感染するのか	生化学
緑茶を飲んで脳の老化をストップ ！	医薬生命化学
環境ホルモン、その怖さは動物によって違う ！　何故そうなの？	薬剤学、衛生化学
遺伝子でわかる解毒機能の低下と体質性黄疸との関り	臨床薬品学
緑茶錠でガン退治	薬品製造工学

教員の人事

就　任（4月1日付け）

辻　　邦郎　　薬学部長
小林　みどり　経営情報学部長
野口　博司　　薬学研究科長
菱田　雅晴　　国際関係学研究科長
影山　喜一　　経営情報学研究科長
五島　廉輔　　環境科学研究所長
梅田　祐喜　　短期大学部長
有泉　祐吾　　短期大学部学生部長
関根　龍子　　短期大学部附属図書館長

採　用（4月1日付け）

大橋　典男　　環境科学研究所助教授
津富　　宏　　国際関係学部助教授
ｶｰｸC・ﾊｲﾄﾞ　国際関係学部助教授
宮崎　晋生　　国際関係学部講師
林　　久由　　食品栄養科学部助手
小田巻　眞理　食品栄養科学部助手
熊坂　隆行　　看護学部助手
小坂　美智代　看護学部助手
斉本　美津子　看護学部助手
佐橋　　徹　　短期大学部教授
奥田　都子　　短期大学部助教授
劔持　直美　　短期大学部助手
（4月2日付け）
中野　眞汎　　薬学部教授
（5月1日付け）
奥原　秀盛　　看護学部助教授

昇　任（4月1日付け）

小久保康之　　国際関係学部教授（助教授より）
渡邉　　聡　　国際関係学部教授（助教授より）
桑原　厚和　　環境科学研究所教授（助教授より）
菅谷　純子　　薬学部助教授（講師より）
児矢野マリ　　国際関係学部助教授（講師より）
石井　康子　　薬学部講師（助手より）
吉成　浩一　　薬学部講師（助手より）
森　　勇治　　経営情報学部講師（助手より）
小林　功子　　薬学部講師（助手より）
深江　久代　　短期大学部教授（助教授より）
佐々木隆志　　短期大学部教授（助教授より）
三田　英二　　短期大学部助教授（講師より）
（5月1日付け）
五島　綾子　　経営情報学部教授（助教授より）

英国の The World Innovation Foundation の Fellowshipに選ばれる

経営情報学部の五島綾子教授

経営情報学部五島綾子教授が２００２年１月１７日付けで正式に英国の The World Innovation Foundation から Fellowship に選ばれる栄誉を受けた。

プルトニウムの元素の発見などで１９５１年ノーベル賞を受賞した Glenn Theodore Seaborg 博士が戦争や科学技術の急速の進歩がもたらす世界の疲弊や危機を科学者・技術者が率先して解決しなければならないという信念を持って英国に設立した研究所が The World Innovation Foundation です。Seaborg 博士は２年前亡くなりましたが、その後アメリカのノーベル賞受賞者 Jerome Karle 博士が所長を引き継ぎ、英国においてさらに大きく研究所を発展させ、世界の人口問題や環境問題を世界の科学・技術者が解決を目指すシンクタンクとなっている。

五島教授は２００２年１月１７日付けで正式に、この研究所の Fellowship に選出され、受賞しました。今後、１０年間、この研究所の Fellowship として、地球環境問題などで今までの研究を生かして直接、間接に活躍することとなりました。

日本農芸化学会大会で奨励賞を受賞

食品栄養科学部の阿部尚樹助手

食品栄養科学部の阿部尚樹助手が３月２４日（日）宮城県民会館で行われた日本農芸化学会２００２年度授賞式において、農芸化学奨励賞を受賞した。受賞対象となった研究テーマは「かびの生産する抗酸化物質Bisorbicillinoid類に関する生物有機化学的研究」。

BisorbicillinoidはSorbicillinol２分子またはその類縁化合物２分子が反応してできた化合物群で、この研究において受賞者らは多くの新規Bisorbicillinoidの化学構造を決定し、またそれらの生合成経路でSorbicillinolが鍵物質であることを明らかにした。Bisorbicillinoidは抗酸化活性以外にも興味ある生理活性をもち、注目されている化合物群である。

日本農芸化学会論文賞を受賞

生活健康科学研究科博士後期課程　加治屋勝子さん他

加治屋勝子さん

熊澤茂則助手

中山勉教授

渡辺達夫助教授

生活健康科学研究科博士後期課程の加治屋勝子さん、熊澤茂則助手、中山勉教授が日本農芸化学会大会で2001年度BBB論文賞を受賞した。対象となった論文は、K. Kajiya, S. Kumazawa, and T. Nakayama, Steric Effects on Interaction of Tea Catechins with Lipids Bilayers, Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 65(12), 2638-2643 (2001)。緑茶に含まれるカテキンと脂質二重層との相互作用をカテキンの立体構造の影響の面から論じたものである。

また、食品栄養科学部の渡辺達夫助教授は、京都大学伏木研究室からの論文の共著者として、2001年度BBB論文賞を受賞した。対象となった論文は、K.Ohnuki, S. Haramizu, K. Oki, T. Watanabe, S. Yazawa, and T. Fushiki, Administration of Capsiate, a Non-pungent Capsaicin Analog, Promotes Energy Metabolism and Suppression Body Fat Accumulation in Mice, Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 65(12), 2735-2740 (2001)。

BBB論文賞は、過去一年の間にBioscience, Biotechnology, and Biochemistry誌に掲載された全論文のうち優れた論文（全体の３％以内）が表彰される。

図書館だより

ＯＰＡＣ（蔵書検索システム）について

図書館に目当ての図書や雑誌があるかどうかを探すには、ＯＰＡＣ（Online Public Access Catalog：蔵書検索システム）を利用しましょう。
図書館に来ればもちろん、図書館に来なくても、インターネットに接続したコンピュータで
http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/~library/
（附属図書館のホームページ）にアクセスし、「OPAC」のアイコンをクリックすると 、目当ての本や雑誌を探すことができます。（平成3年以前に受入した図書など、一部データが入っていない場合がありますので、図書館のカード目録でも検索してください。）
５月から図書館のコンピュータシステムが新しくなり、従前のＯＰＡＣに横断検索機能が付加され、検索値を一度入力しただけで、本学だけでなく、静岡大学附属図書館・浜松医科大学附属図書館の蔵書検索ならびに国立情報学研究所の蔵書目録データベース（NACSIS Webcat）を通じて、全国の大学図書館などの蔵書を検索することができるようになりました。

所蔵一覧で配置場所、請求記号を確認し、該当する書架で本を探します。

「静岡大学」「浜松医科大学」のボタンを押すと、それらの図書館の所蔵も検索できます。
「Webcat」のボタンを押すと、国立情報学研究所が提供している全国の大学図書館などの蔵書目録データベースも検索できます。

ＯＰＡＣ用の端末機が新館の各階に2台づつ増設され、本館の8台と合わせて14台が利用できるようになりましたので、ぜひご利用ください。

該当するチェックボックスにチェックし、
探している本のタイトルや著者名などを入力し、
検索実行ボタンを押します。

検索結果をクリックすると、詳細が分かります。

本学教員からの著書寄贈

先生の著書を寄贈していただきました。
≪本学教員著書≫　(平成１４年４月以降)

◎伊勢村　護　（食品栄養科学部）
・茶の化学成分と機能　　弘学出版　2002年
（請求記号 619.8/C33 ：２階閲覧室配置）
◎静岡県立大学公開講座
・人間といのちヘルスサイエンス：21人の提言
静岡新聞社　2002年
（請求記号498/Sh94 ：２階閲覧室配置）
◎国際関係学部　国際政治経済コース
・２１世紀の国際社会を考える
静岡県立大学国際関係学部　2002年

クラブ・サークル紹介

準硬式野球部

準硬式野球部は現在部員は12名、マネージャー3名で活動しています。顧問は食品栄養科学部教授で野球部OBでもある木苗先生です。
5月4日に終わった春季リーグ戦は、結果はいまいちでしたが、後半は堅い守備とエース有井の好投があり、また攻撃面では頼れる四番バッター中條を中心に、一点を確実に取る野球を主将坂本がまとめ、陰で支えるという様子が見られ、調子は上がってきています。秋季リーグでは大きな期待が持てそうです。
県内のリーグ戦の他にも、東海選手権、OB戦、岐阜薬科大学との交流試合などを行っています。
勉強等々で忙しい部員が多く、練習に集まる人数が少ないときもありますが、みんな野球が大好きで、常にうまくなりたいという向上心をもって取り組んでいます。
秋季リーグでの優勝、ビールかけを狙ってこれからも練習に励んでいきます。　　（武田水紀）

吹　奏　楽　部

こんにちは。吹奏楽部です。吹奏楽部は現在とても人数が少ないながらも、みんな個性が強く、いつも楽しく活動しています。音楽が好き、楽しいことが好き、しゃべることが大好き（？）というにぎやかなメンバーでの練習は笑いが絶えずみんな仲良し！
そんな私たちも「やるときはやろう！」をモットーに５月には隣の芝生公園で子どもたちを相手にふれあいコンサートをやったり、剣祭の時には私たちの奏でるハーモニーをききながらお客様にくつろいでいただけるようなスペースを提供しています。そして１年で１番のイベント、１２月の定期演奏会ではより多くの人に聞いてもらい、自分たちが満足できるようなステージになるよう、夏頃からコツコツと頑張っています。そして今年はなんと夏の吹奏楽コンクールに出ようと部員一同意気込んでいます！
個性豊かなメンバーですが、自分たちの大好きな音楽をたくさんの人にも楽しんでもらいたいという思いはみんな一緒。ぜひ明るくにぎやかな私たちの演奏を聞きに来てください。きっと楽しい気持ちになりますよ。そして吹奏楽に興味をもって、ちょっとでも演奏してみようかな・・と思った方、いつでも入部ＯＫです。気軽に遊びにきてください。　　（馬場知子）